
話題管理の機能をもつ接続語

松尾文子

1. はじめに

本論では話題管理 (topic management) や談話管理 (discourse management) の機能をもつ接続語の now、so、well、anyway の用法を考察する。

ここで取り上げる話題・談話管理とは話題の転換と切り出しのことである。また、接続語という用語を用いたが、より包括的な言い方をすると、談話辞 (discourse marker) と言ってもよい。談話辞に具体的に何を含めるのかには関しては諸説あるが、接続詞 (and, but, so など)、副詞 (now, then など) から、間投詞 (oh, well など) や I mean、you know などの定型表現まで含める場合もある。しかし、これらの範疇も決して clear-cut なものではないし、話題の転換や切り出しを示す語は、広い意味では談話のある部分と別の部分とのつながりを示すと考えられるので、あえて接続語という表現を用いることにする。

日本語にすると、「それで、ところで、さて、それはそうと」などと訳されるこれらの四語は、どのように用いられ、どのような違いが見られるのであろうか。

2. now

2.1 先行研究

now はしばしば discourse-initial として用いられ (Quirk et al.1985: 639)、話題の転換を示すが (Ball 1986:85; Swan 1995:154; COBUILD²)、同じく話題転換の機能をもつ後述する anyway には見られない特徴は、談話の新たな部分が始まることを示す (Ball 1986:85; Swan 1995:154) と

いうことである。¹ now は聞き手の注意を別の話題や、今、この時点で関連のあるできごとに移行させ (Quirk et al.1985:639)、Biber et al.(1999:1088) にもあるように、局面を新たに展開させる (clearing 'a bit of conversational space' ahead) 機能をもつ。

2.2 話題の転換

次例は名画を不正に手に入れようとする一味の話である。Goya の絵を手に入れるために、本物のサインの上ににせの画家のサインを描き、さらにその上を Goya というサインで覆うという手の込んだ方法で、その絵を所有している美術館から安く買い上げた男は、仲間の Tracy と Porretta の待つアパートに戻る。

(1) Tracy hugged him. "Come in."

Porretta took the painting and place it on a table.

"Now," the hunchback (=Porretta) said, "you are going to see a miracle — a Goya brought back to life."

(S.Sheldon, *If Tomorrow Comes*)

Porretta がこのように言ってアルコールでにせの画家のサインをこすると、下から本物の Goya のサインが現れる。話し手は now で聞き手の注意を引いておいて、話題を転換して新たに局面を展開させている。

次も局面の移行がよくわかる例である。Kane and Cabot 銀行の頭取として、Alan Loyd の最後の演説が行われた。

(2) When the clapping died away, Alan Loyd rose for the last time as chairman of Kane and Cabot.

"And now, gentlemen, we must elect my successor. …"

(J.Archer, *Kane and Abel*)

Loyd は演説を終えた後、now で一同の注意を引いておいて新たな局面へと話を進めている。このように、and now の形が用いられることがある。

次例は、帰りが遅かった息子に父親が「すぐに私の書斎へ来い」と言った後の場面である。

- (3) His father strode ahead of him into the study and sat on a leather stool by his table. His mother followed and stood silently by the door.

“Now tell me exactly where you have been and why you took so long to return, and be sure to tell me the truth.”

(J.Archer, *op. cit.*)

父親は now で息子の注意を引いておいて、本当のことを話すんだぞと局面の展開を図っている。このタイプの now は admonitory (警告的・忠告的) と呼ばれ、命令文と共に用いられることが多い (Greenbaum 1969: 56)。

次例は、犬(=he) が飼い主にえさをせがんでいる場面である。

- (4) “Just a mo’, sweetheart.” With his free hand he picked up a Mini-14-Carbine from the floor beside the bed and laid it across the pillows. “Now. Now, then. We’ll have our supper in a minute.”

(T.Harris, *The Silence of Lambs*)

飼い主は「さあ、さあすぐご飯にしようね」と、局面を展開させている。このように now then の形も見られるが、これは話し言葉で用いられ、注目して欲しい、あるいは話題を転換しようとしていることを示すものである (CIDE; COBUILD²)。

このように、now は聞き手の注意をそれまで話されていた話題から次の話題へ shift させて、新たに局面を移行・展開させるときに用いられる。

2.3 話題の切り出し

先行研究では、場面の冒頭や話題の切り出しに *now* が用いられるという明確な記述はなかったが、実際にはその例が見られる。

技師がコンピュータ室に入りコンピュータの方へ歩いて行って、手にしていた新聞と飲み物を机に置くと、そこで待っていたスパイの Ethan がこう切り出す。

- (5) Ethan: *Now*, inside the black vault, there are three systems operating whenever the technician is out of the room.
(*Mission Impossible* [映画台本])

Ethan は部屋に入って来た技師の注意を引いておいて、コンピュータ室の説明を始めて局面を展開させている。

次も同様の例である。客が骨董品店で品物を眺めていると、店員が野球やフットボールなどのスポーツの記録の載った古い本を取り出し、次のように言う。

- (6) Clark: *Now* this has an interesting feature. It has a dust jacket. Books used to have these to protect the covers.
(*Back to the Future III* [映画台本])

店員は *now* でまず客の注意を引き、新たに局面を展開させて品物の説明を始める。

このように話題の切り出しで用いられる *now* は、聞き手の注意を引きつける機能を果たす (attention getter)。

話題を転換する場合でも、話題を切り出す場合でも、*now* は談話の新しい局面への展開を合図する。話題を転換する場合は、聞き手の注意をそれまでの話題から新たな話題へと移行させる機能 (attention shifter) が、一方、新たに話題を切り出す場合は、聞き手の注意を話し手に向けさせる

機能 (attention getter) がある。そして、now によって談話の新たな部分への移行、新たな局面への展開が示されるのである。

3. so

3.1 先行研究

so は新しい話題を導入したり (COBUILD²; OALD⁵)、元的话题に戻す合図 (recall signal) として (Ball 1986:99; CIDE) 用いられる。また話題の転換だけではなく、場面の冒頭的话题の切り出しでも用いられる。以下の例からわかるように、接続語 so の推論結果を表すという原義²が保持されている度合いの高いものもあれば、ほとんど保持されていないものもある。

3.2 話題の転換

次は so の原義がかなり保持されている例である。Conrad は自殺未遂事件を起こして8ヵ月半の間精神病院に入院し、退院後帰宅したが、いまひとつ調子がよくない。そこで主治医である精神分析医の Berger の所にカウンセリングに来た。そこで、医者に病院でどんなことがあったのかと質問された後のやりとりである。

(7) The eyes (=Berger's eyes) are fixed upon him thoughtfully.

They hold him still.

“So how does it feel to be home? Everyone glad to see you?”

“Yes, sure.”

“Your friends, everything okay with them?”

“Fine.”

“It says here, no sisters, no brothers. Right?”

“Right,” he (=Conrad) says.

Berger leans back in the chair. ... “So, what d'you want to work on?” he asks. (J.Guest, *Ordinary People*)

最初の so の箇所では、精神病院でのことから話題を転換して家でのことを話そうとしている。二つ目の so の箇所では、友達とはうまく行っているし、兄弟姉妹はいないと書類に書いてあるからそちらの方も問題はないだろうし、それならどういう目的でここに来たのかと尋ねている。Conrad の話から結果的にこのような疑問が生じており、推論結果を表す so の本来の意味が生きている。このように、特に疑問文を従えて、話し手が目下のところ興味を抱いている話題を導入することがある (CIDE)。

次も疑問文を従えて、話し手が興味をもっている話題を導入する例である。Cole は草レースのドライバーで、レースでけがをした友人 (=he) の容態を医者に見かねて尋ねる場面である。

(8) Cole: Cole Trickle.

Dr. Wilhare: Cole.

Cole: So, how is he? (*Days of Thunder* [映画台本])

まず初対面のあいさつをごく簡単にすませてから話題を転換し、さっそく本題に入る。ただし (7) の二つ目の例とは異なり、推論結果を表す so の原義は保持されていない。

次は、so の原義がかなり保持されている例である。Conrad は心の病を抱えている少年で、精神分析医の Berger に学校の水泳部のコーチが気に食わないと訴えている。それに対して医者は次のように続ける。

(9) “Forget last year. You think you’re the same person you were last year?” He (=Conrad) shrugs, lying down again, staring upward at the ceiling.

“So, tell me about the coach,” Berger says. (J. Guest, *op.cit.*)

医者は、今の君は去年の君とは違うのだから去年のことは忘れろと言うが、Conrad はそれを受け入れようとしない。その様子を見て、結果的に医者

は再びコーチのことに話題を転換しており、so の原義が反映されている。

so の原義がほとんど保持されていない場合がある。Platonov はソヴィエト大使館の三等書記官で、相手はアメリカ海軍兵学校の教官である。2人は意見が合わないことが多いが、何の罪もない子供が犠牲になるのはやり切れないという点では意見が一致した。

(10) “We disagree on many things, but no man can fail to love his children.”

“So.” Platonov changed gears smoothly. “What did you really think of Professor Hunter’s little speech? Should America seek to foment counterrevolution in the socialist states of Europe?”
(T.Clancy, *Patriot Games*)

「さらりと調子を変えた」とあるように、話題を転換して本題に入っている。

次はお互い家庭のある男女が偶然出会い、恋に落ちる物語の一場面である。彼が本屋で本を探していると、ずっと思いを寄せてきた彼女が声をかけてきた。

(11) “Hi.”

“Hello. You surprised me.”

“Sorry.”

“No. Good. I mean, it’s OK. So. How are you?”

(K.Harper, *Falling in Love*)

so の後で話題を転換しているが、(10) (11) は接続語 so の原義はほとんど消えて、単なる pause filler に近い。

3.3 話題の切り出し

話題の転換の場合は、転換する前の別の話題が具体的な発話となって先行文脈で提示されていた。so による話題の切り出しの場合、その話題を切り出すという行為の前提となる発話の状況が存在する。このことが全く新たな局面を now とは異なる点である。

話し手 (=she) の仲間は、最初彼女のアパートに電話をしてきたが、彼女を電話交換台へ行かせてそこで話すことにした。交換台での電話のやりとりの場面である。

- (12) “So you think the apartment here will be monitored?” she said immediately. (S.Sheldon, *If Tomorrow Comes*)

話し手は、仲間が自宅の電話を使わないことから推論して、交換台での電話の第一声でこのように切り出す。発話の状況という非言語的文脈から導き出した推論結果を述べているのである。

もう一つ同様の例をあげる。Anne は郵便局に心待ちにしている小包を取りに行って、自転車を押して歩きながら小包の中に入っていた手紙を読んでいる。そこに突然友人の Gilbert が現れる。

- (13) Gilbert: So …
 Anne: Ah!
 Gilbert: This is why you keep disappearing on me every time
 I plan to pick you up after school!
 (Anne – the Sequel [映画台本])

Gilbert は Anne の様子を見て、すなわち非言語的文脈から推論して、このように発話している。これらの非言語的文脈の存在が、話題を切り出すという行為の前提となる発話の状況である。

次例は so が接続語でありながら、呼びかけ語的な働きもしている例である。Rusty がコンピュータで犯罪のファイルを検索し、Bファイルに関

する情報を見つける。そこに刑事の Liprancer が入って来る。she は殺された検事補である。

(14) Liprancer: *So* … I’m here.

Rusty: Hey, Lip. What the hell was she doing a “B” file?

(*Presumed Innocent* [映画台本])

この2人はすでに会う約束をしていたので、すでに共有する文脈情報がある。そこで Liprancer は「やあ、来たぜ」と切り出している。

次も同様の例である。絵を見つめている Darien に Bud が近づいて行き、こう切り出す。

(15) Bud: (sighs) *So* what do you see in this?

Darien: Purity. Innocence.

Bud: A few thousand dollars down the tubes, if you ask me.

(*Wall Street* [映画台本])

この場面では話し手と聞き手は、絵を見ているという状況を共有している。

so が話し手と聞き手が共有する状況や情報がある場合に用いられるということから派生して、話し手の聞き手に対する親近感が含意される場合がある。次例は車中での場面である。he は Julius という名のリムジンの運転手である。this は運転手が客である話し手との距離を保つことを指す。

(16) And he was even extending this to our lunch; we might sharing a table, but he was not going to impose himself unless asked.

Finally I realized this was getting absurd. “So Julius,” I said.

“How is that tuna fish sandwich?” (B.Greene, *Limo*)

話し手は運転手の控えめすぎるほどの態度に耐えかねて、このように切り出す。話し手は運転手ともう少し親しくしたいと思っており、so には話し手の運転手に対する親愛の念が込められている。

次も同様の例で、Carole が夫の Goose を空港に出迎えに来た場面である。Goose と Marverick は同僚である。Carole は Marverick に歩み寄り、こう言う。

(17) Carole: So, Marverick! Goose told me you're in love with one
of your instructors!

Marverick: Is that right? (Top Gun [映画台本])

Carole は Maverick と旧知の仲で、彼に対する親愛の情が表れている。このような so は接続語というよりは間投詞的で、話し手の感情移入が見られる。

もう一つ同様の例をあげる。病院の救急病棟での場面である。Sam は銃で撃たれてすでに死んでおり、ゴーストとなって自分の死体の隣にある椅子に座っている。見知らぬ年配の男が近づいて来て言う。

(18) Elderly Man: So, what happened to you?

Sam: What?

Elderly Man: You're new, huh? I can tell.

Sam: Are you talking to me? (Ghost [映画台本])

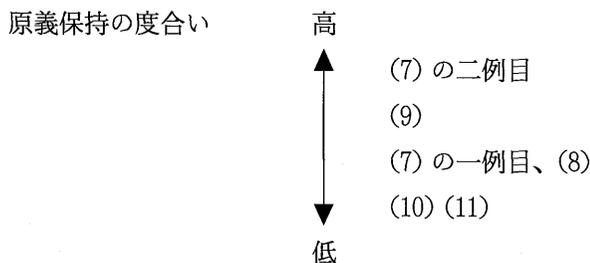
Sam は話しかけてきた年配の男のことは知らないが、男は Sam に対して親近感を覚えて、どうしたんだと切り出す。間投詞的で話し手の感情移入が見られ、同時に呼びかけ語的な機能も果たしている。

3.4 原義の保持

話題の転換を示す場合でも、話題の切り出しの場合でも、接続語 so の

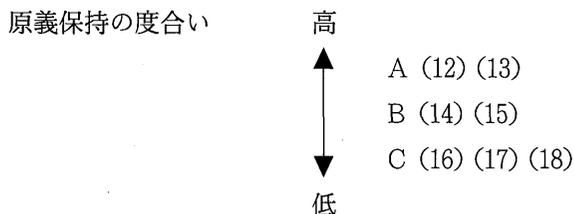
核になる「推論結果を表す」という意味が保持されているものからそうでないものまで、さまざまな例が見られる。

話題の転換を示す用法における so の原義が保持されている度合いは、ほぼ次のようになる。かつこの数字は例文の番号である。



(10) (11) では、so は pause filler のような機能しか果たしていない。

一方、話題の切り出しを示す用法では、ほぼ次のようになる。



A、B グループでは、非言語的文脈、すなわち発話の状況からの推論によって、話し手は so 以下のように切り出す。この2つのグループでは、発話の状況は話し手と聞き手にの双方に共有されている。B グループ以下のグループでは、so には呼びかけ語的な機能も見られる。C グループでは、発話の状況が話し手と聞き手に共有されている場合もあるが、話し手側からの聞き手に対する一方的な共感や親愛の情といった心理的つながりしかない場合もある。接続語というより間投詞的な色彩が濃い。

4. well

4.1 先行研究

well は話題を転換するときに用いられる (Ball 1986:116; OALD⁶)。その話題は新たな話題である場合も、先行の話題へ戻る場合もある (Leech 1989:518; COBUILD²)。well には hesitator や utterance initiator の用法があり (Svartvik 1979)、well を用いることによって ‘speaker’s aliveness to the conversational demand for an answer’、‘speaker’s aliveness to the need to accomplish coherence’ が表される (Schiffrin 1987)。このような ‘consideration’ (Schourup & Waida 1988:136) や ‘deliberation signal’ (Biber et al. 1999:1086) といった、語用論的な含意とは、話し手は会話を続ける意志はあるが、当該の話題については少し考える必要があるということである。そしてこの語用論的な含意が、接続語としての用法にも反映されている。

4.2 話題の転換

私生児の Wladek はコンスタンチノーブルの街をうろついていて、兵隊に捕らえられた。Wladek を引き渡された伍長が料理女の所へ彼を連れて行ったときの会話である。

(19) “Hello,” she said with a beaming smile. “What’s your name, then?”

Wladek told her.

“Well, laddie, it looks as though you could do with a good British meal inside you. …” (J.Archer, *op. cit.*)

女は不安そうな少年の様子をうかがいながら、話題を転換している。

well は他の接続語句と共に用いられることが多い。私立探偵の Moody のもとへ精神分析医の Stevens が訪ねて来た。

(20) “Mr. Stevens?” Moody greeted him.

“Dr. Stevens,” Judd said.

“Sit down, sit down.”

Judd looked around for a seat. … , and gingerly sat down.

Moody was lowering his bulk into an oversized rocking chair.

“Well, now! What can I do for you?”

(S.Sheldon, *Naked Face*)

探偵は客である依頼人の反応をうかがいつつ、話題を転換している。well now の形は、このように話題の転換を示すのに用いられる (Ball 1986:85)。

次は作家である話し手とアメリカ大統領の面会の場面である。

(21) We had been talking for nearly two hours, …

With no warning, he put hands on his knees and said, “Well, anyway, I have to knock this off.”

(B.Greene, *Reflections in Wary Eyes*)

‘well, anyway’ という語句なしで直接的に「もう終わりにしなければならぬ」と言うよりも、well を用いることで相手に対する気遣いを見せた上で話題を転換している印象を聞き手に与える。この anyway も後述するように、話題を転換する合図として用いられる。

4.3 話題の切り出し

Tracy は Charles との結婚を望んでいるが、名家で富豪でもある彼の両親の Stanhope 夫妻は、この結婚を快く思っていない。しかも、Tracy はすでに妊娠している。

(22) “I don’t understand how in this and —” Mrs. Stanhope began, but she never finished the silence, because at that moment

Charles came into the room. …

“Well,” Charles said, “how are you all getting along?”

(S.Sheldon, *If Tomorrow Comes*)

Charlesはこの場のぎこちない雰囲気を感じ取り、両親や Tracy の反応をうかがいながら上のように切り出す。

次も同様の例である。William は Kane and Cabot 銀行の跡取息子である。親友の父親で Lester 銀行頭取である Charles に頼んで、Lester 銀行を見学させてもらった。帰宅途中の車中で次のように言う。

(23) William was silent, pensive, as they were driven in the car.

“Well, William, did you enjoy your visit to my bank?” asked Charles Lester genially.

“Oh, yes, sir,” replied William. (J.Archer, *Kane and Abel*)

Charles は黙って考え込んでいる William の反応をさぐりつつ、こう切り出す。このタイプの well は、疑問文を従えることが多い。話し手が自らの主張をするのではなく、相手の様子や反応を探っているからである。

well が相手の反応を探って応答を促す機能をもつことが、次の例でよくわかる。

(24) He waited until the British officials were sufficiently far away, then demanded urgently: “Well?”

“Absolutely no trouble,” Braley assured him.

(B.Freemantle, *Clap Hands, Here Comes Charlie*)

このように、well 一語で疑問調で用いられると、「それでどうなんだ？」の意を表す (Ball 1986:117)。また上例のように、休止後に会話を再開するときに用いられる (OALD⁵)。

5. anyway

5.1 先行研究

anyway は先行の談話からの逸脱 (Swan 1995:153) や話題の転換を示す。中断後に先行の話題に戻るが (COBUILD⁹; COD¹⁰; LDOCE⁹; NODE; OALD⁵)、anyway によって、これまで述べられたことは重要ではなく、主張したいのは次のことである (Swan 1995:159)、あるいは話題が最も興味深い箇所到達したことが (CIDE) が示される。すなわち、anyway は話題の転換を示すが、特に話題が脇道に逸れた後、本題に戻る合図となっているのである。

また、Sperber & Wilson の Relevance Theory (関連性理論)⁸ の枠組みでの分析によると、談話内の関連性を作るのに discourse connective が貢献する。discourse connective は発話の処理方法、すなわち発話解釈に制限を課す。この枠組みで、Brockway (1981:76) は、anyway が導く発話は先行発話で表される命題を含む k-subsets に対して relevant でないことを示すとする。k-subsets とは、発話の語用論的含意の算定の際に用いられる命題を含む context subsets のことである (72)。また、Blakemore (1987:142) は、anyway が導入する命題は直前の先行発話を含まない文脈において relevant であるとする。いずれも上で述べた、先行の談話からの逸脱、話題が脇道に逸れる、ということに当てはまる。

5.2 話題の転換

she の夫は資産家で、フロリダの土地ブームに投資するために Kane の銀行から借金をしていたが、支払い不能な状態に陥ってしまった。さらに不幸なことに、その資産家が飛行機事故で死亡し、保証人になっていた彼女に支払い義務が生じた。彼女はフロリダにある家や宝石類を売って借金を返済しようとするが、Kane は家は手元に残しておくべきだと主張する。それに対する彼女のことばである。

(25) She hesitated. "I appreciate your generosity, Mr. Kane.

However, I have wish to remain under any obligation to your bank or to leave my husband's name under a cloud." The little tremor again, but quickly suppressed. "Anyway, I have decided to sell the house in Florida and return to my parents' home as soon as possible." (J.Archer, *Kane and Abel*)

彼女は財産処理の本題から逸れて現在の心情を述べるが、*anyway* で話題を転換して本題を再導入している。このタイプの *anyway* は、通例コマを伴って文の初めで用いられる (Schourup & Waida 1988:44)。

次も同様の例である。Sarah と Macon は離婚寸前の夫婦である。Sarah は早く別居状態に終止符を打ち、離婚の法的な手続きを済ませたいと思っている。その話をしていたが、途中昔の交友関係や死んだ子どものことなどに話が逸れる。そして最終的に彼女は次のように言う。Albright は彼女の弁護士である。

(26) Sarah pulled her coat on, making a sloppy job of it. One corner of her coat was tucked inside. "So *anyway*," she said. "this is what I wanted to tell you: I'm having John Albright send you a letter." (A. Tyler, *The Accidental Tourist*)

anyway 以下で Sarah は話題を転換して、本題である離婚手続きの話題を再導入している。この例のように、*so anyway* の形がよく見られるが、両語とも話が脇道に逸れた後、本題に戻る合図として用いられる (Ball 1986:15, 99)。

これまでの例では、戻るべき本題が先行文脈で具体的な発話の形で提示されていたが、そうでない場合がある。

Macon は犬の Edward を連れて実家に帰った。兄の Porter と妹の Rose が夜外へトイレに行きたがる犬に起こされて困るだろうから、Macon は使っていない浴槽を犬のトイレ代わりに使おうと提案する。

(27) “But who would clean it (=bathtub)?”

“Ah.”

They all looked down at Edward, who was lying at Rose’s feet. He rolled his eyes at them.

“How come you have him, *anyway*?” Porter asked Macon.

(A.Tyler, *op.cit.*)

Porter は犬のトイレに関することから話題を転換して、なぜこの犬を飼っているのかと Macon に尋ねる。Macon が犬を連れて実家に帰って来たのは初めてであるし、ましてや犬を飼っていることさえ彼らは知らなかった。したがって、犬を飼っている理由は当然彼らが知りたいことであろう。このことは先行文脈で具体的な発話となって現れていないが、Porter の「何でこの犬を飼っているんだ？」は、彼らの関心事であり、心理的には本題の導入であると言える。⁴ このタイプの *anyway* は、通例コンマを伴って疑問文の後で用いられる (Schourup & Waida 1988:45)。

次も同様の例である。脚を骨折した Macon は生活が不便なので実家に戻っている。そこに上司が訪ねて来た。Macon は犬や骨折のことを話した後、次のように尋ねる。

(28) “How’d you find me, *anyway*?” Macon asked.

(A.Tyler, *op.cit.*)

Macon は居場所を上司に知らせていないから、上司が家を訪ねて来たことを不思議に思っている。そこで話題を転換し、なぜここがわかったのかと尋ねる。上司がやって来たことに関する話題は先行文脈に現れていないが、このことは本題でないとしても、おそらく Macon にとっては重要な関心事であろう。したがって、この例は心理的には本題の導入であると考えられる。

このように、*anyway* は話題の転換を示すが、通例本題に戻る合図とし

て用いられるから、話題の再導入であると言える。その本題は、先行の文脈で具体的に言語化されている場合もあるし、そうでない場合もある。本題が発話の形で先行文脈で提示されていない場合も、その話題は発話の行われる状況からすると、当然予想される事柄であるし、話し手にとっては重要であろう事柄である。心理的には話題の、通例は本題の再導入である。anyway は直前の話題とは異なることを述べる合図になるので、談話の切り出しには用いられない。

6. おわりに

now は話題転換の場合は、聞き手の注意をこれまでの話題から異なる話題へ移行させ (attention shifter)、話題の切り出しの場合は、聞き手の注意を話し手の発話に向けさせる (attention getter)。いずれの場合でも、now は談話の局面を新たに移行・展開させる機能をもつ。

so の接続語としての原義は、「推論結果を表す」である。話題転換、切り出し、いずれの場合でも、この原義が保持されているものからほとんど保持されていないものまでである。原義が薄れてしまうと、単なる pause filler に近くなる。場面の冒頭で話題を切り出す場合、その話題を切り出すという行為の前提となる発話の状況、すなわち非言語的文脈が存在する。話し手と聞き手が共有する発話の状況や情報のことである。この「共有」という概念から、たとえ話し手側の一方的な思いであるとしても、話し手の聞き手に対する共感や親近感といった心理的なつながりが生まれ、呼びかけ語や間投詞的な機能をもつことがある。本来は接続語であったものが、その原義が薄れると pause filler に、また、話し手の主観が強まると間投詞的になる。

それに対して、well は間投詞が接続機能をもつようになっている。well のもつ hesitation、consideration といった語用論的含意が接続語としての用法にも反映され、相手の反応をうかがいながら話題の転換や切り出しをする。

anyway は話題転換の場合、新たな局面への展開を示す now とは対照

的に、脇道へ逸れた後、元の話題、多くの場合は本題に戻る。元の話題が先行の文脈で示されないことがあるが、その場合でも心理的には話題の再導入であると言える。また、anyway は話題の再導入であり、直前の話題とは異なる話題に戻る合図であるから、話題の切り出しには用いられない。

注

- 1 関連の話題に戻る合図となることもあるが (Biber et al.1999:1088; Leech 1989:296)、ここではそれは取り上げない。
- 2 詳細は松尾 (1993, 1997) を参照。
- 3 詳細は Sperber & Wilson (1995) 参照。
- 4 Ball(1986:16) にあるように、実際はどれが本題でどれがそうでないのかを判断することが容易でないことがある。

参考文献

- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. Macmillan.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.
- Brockway, D. 1981. "Semantic Constraints on Relevance." In H. Parret, et al. eds. *Possibilities and Limitations of Pragmatics*. 51-78. John Benjamins.
- Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. Longman.
- 橋内武. 1999. 『ディスコース：談話の織りなす世界』くろしお出版.
- Leech, G. 1989. *An A-Z of English Grammar and Usage*. Macmillan.
- 松尾文子. 1993. 「談話接続語としての so」『英語基礎語彙の文法』193-202. 英宝社.
- 松尾文子. 1997. 「推論を表すつなぎ語 so と then」『英語語法文法研究』第4号. 135-147. 英語語法文法学会.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

- Schiffrin, D. 1987. *Discourse markers*. Cambridge University Press.
- Schourup, L. and T. Waida. 1988. *English Connectives*. Kuroshio-shuppan.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. (2nd edition) Blackwell.
- Svartvik, J. 1979. "Well in conversation." In S. Greenbaum, et al. eds. *Studies in English Linguistics For Randolph Quirk*. 167-177. Longman.
- Swan, M. 1995. *Practical English Usage*. (2nd edition) Oxford University Press.

辞書

- CIDE: *Cambridge International Dictionary of English*. (1995)
- COBUILD²: *Collins COBUILD English Dictionary*. (1995)
- COD¹⁰: *Concise Oxford Dictionary*. (1999)
- LDOCE³: *Longman Dictionary of Contemporary English*. (1995)
- NODE: *The New Oxford Dictionary of English*. (1998)
- OALD⁵: *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. (1995)